蘇るリットン・ストレイチー（1）

――帝国・冒険・玉砕・セクシュアリティ――

中原章雄

ストレイチーの「序」を読む

ストレイチーの『ヴィクトリア朝の偉人たち』を読まない人でも、その短い「序文」については知っているであろう。

そこでストレイチーは、四人の著名人たちを料理するまえに、前時代そのものに軽い揺さぶりをかける。

彼は、こう語り始める。ヴィクトリア朝時代の歴史はけっしてかかれないであろう。われわれは、あまりにその時代について知り過ぎているからだ。「われわれの父や祖父たちが、あまりにも厖大な情報を集積して残してくれたので、ランケの勤勉をもってしてもこれに埋没させられてしまうだろうし、ギボンの洞察力をもってしても、これを前にしてはひるまざるをえないであろう。」

軽いと見える揺さぶりは、内外の大家の名前を引き合いにだし、抜け目なく補強されている（「ランケの勤勉?」、あの男は『ローマ教皇史』でも読んでいたのか? じっさいには、ストレイチーがランケの史書をひもといた形跡はまったくない。マイクル・ホルロイドの八〇〇ページにおよぶストレイチー伝のなかに、このドイツ近代史家の名前は一度も言及されていない）。

だが、だれもランケという重々しい名前を気にする必要は、おそらく最初からなかったようである。ストレイチーの狙いは、大戦末期のイギリスで、歴史家として無視しがたい名であるにせよ、敵国の大家の名をわざわざ引き合いにだして、読者を挑発することの方にあったであろう。そのために、ストレイチーは、ブルームズベリ・グループの教養の圏内に入らない名前を、ここであえて動員したのにちがいない。

ヴィクトリア朝というような大きな時代を探るには、「綿密に語るという」正攻法でなく、「もっと巧妙な戦略」が賢明であろう。「側面や背後からの」攻撃が有効であろう、こう述べてストレイチーは、意外なイメージを導入する。ときには、過去の「暗い奥まった場所に、突然、暴露的なサーチライトの光を浴びせる」ことも必要であろう、というのである。

ドイツ軍のロンドン空襲にたいし、イギリスが最新式のサーチライトを導入したのは、一九一六年からであったといわれる。『ヴィクトリア朝の偉人たち』を書くストレイチーの目は、すでに戦後を見据えているが、彼はそれを読む戦中の読者のことをけっして忘れてはいないのだ。

イギリスでは伝記の芸術は、不運に見舞われてきた、と彼は述べて、「フランスのように偉大な伝記の伝統をもっていない」と付け加える。われわれには、フォントネルもコンドルセもいない。ストレイチーが読者を挑発し、かれらの愛国心を逆なでしようとしていることは明らかであろう。オクスフォードの「世界の古典叢書」版には、ストレイチーが、ボズウェルやカーライルや、さらには当時刊行中であった『国民伝記辞典』を忘れているのではないか、といわんばかりの趣旨の注が律義に付

けられている。[1]

ここまで批判者としての格調を保ってきたストレイチーは、ここで前時代の伝記を徹底的に罵倒する。「死者を弔うためにそれを著すこと慣習となっている、例の分厚い二巻ものの伝記」、「消化不良の夥しい資料、粗雑な文体、退屈な頌徳の辞」、葬儀屋が最後の仕事としてやってのけたかのようだと云うように。

最後に、また一転してストレイチーは伝記作者の二つの厳粛な義務に立ち返る。簡潔であること、そして、精神の自由を保つこと。ともに、もちろん容易なことではない。

「序」は、「巨匠」の語というフランス文によって締めくくられる。ヴォルテールではなく、どうやらストレイチーの創作らしいのだが。[2]

> 自分は少しも強いない、あえて説きもしない、ただ露わすのみである（Je n' impose rien; je ne propose rien; j'expose.）。

「序」は、全部で七〇〇語あまり、各三五〇語ほどの、僅か二つのパラグラフから成る緊密な構成になっている。ここでストレイチーは挑発し、揶揄し、威嚇し、自らの方法を語る。反逆者の姿勢を示しつつも、また、敢えてイギリスの伝統をわざわざ過小評価するかのように述べながらもストレイチーは、自分なりの方法で、イギリスの伝記文学の伝統を受け継ごうとしてることを十二分に自覚していたであろう。

しかしながら、四人のヴィクトリア朝人、とりわけ、これから論じたいゴードン将軍を彼のスタイルで扱うことは、才人ストレイチーにとっても相当の緊張を強いられる仕事であったはずである。古くて新しい問題を多少とも意識しつつ、ゴードン伝を読み返したい。

一　蘇るストレイチー

『ヴィクトリア朝の偉人たち（*Eminent Victorians*）』は、一九一八年、すなわち第一次大戦が終わる年の五月に出版された。出版後も、戦争は一一月まで、なお半年間続くのだが、すでに厭戦気分の充満していたイギリスでは、新しい時代の到来を予告するストレイチーの著書が秘めた破壊力に、ひとびとは敏感に反応したのであった。

ストレイチーが行ったのは、前時代の偉人たちの仮面を剥ぎとることだけではなかった。彼にとって同じほど重要な仕事は、かれらを顕彰する手段となっていた伝記というジャンルを徹底的に批判することであった。真の新しさは、その文体であったかもしれない。

「例の分厚い二冊本」の伝記、とストレイチーはこの本の「序」で吐き捨てるように云っていた。対照的に彼が提示したのは、四人の「偉人」を込みにした、スリムな一冊であった。だが、むしろエッセイとも云うべき四人の伝記は、すべて極めて簡潔ではあるが、毒はその中に十分に盛られていた。

しかしながら、ストレイチーの「偉人伝」は出版時に衝撃的であっただけに、時間が経つと、その手法はもう古い、乗り越えられたと評価されるようにもなってきた。

たしかに、彼の本を、暴露的、ディバンキングな伝記と見るかぎりではそうかもしれない。しかし、その手法はそれほど単純ではない。この三〇年ほどの間に、イギリスでは伝記作者の伝記論ともいうべき論集がなんさつか出ているが、それらにはストレイチーへの言及が少なくない。伝記の実作者、理論家の双方から見て、彼の評価はふたたび着実に高まりつつあるのである。[3]

今日の英米では伝記というジャンルは未曾有の繁栄を迎えている。イ

ンターネットであらゆる資料を検索し利用できる現代においては、その厖大な規模は、ストレイチーが恐れたヴィクトリア朝後の比ではない。

「葬儀屋の伝記」は少なくなったにしても、新たな繁栄のなかで彼が批判した弊害は形を少し変えて氾濫しているであろう。あらためてストレイチーの出番がまわって来たのは不思議ではない。

だが、現代のことはさておき、ストレイチーの毒は出版時から（かりに「毒」に限定したとしても）十分に理解されていたあろうか。とりわけ日本ではどうであろうか。イギリスの伝記文学のなかでは、かなり紹介され、翻訳されてきたとはいえ、その理解度はどうであったろうか。

本稿では、その点が最も疑わしいと思える「ゴードン将軍の最期」を取り上げて検討したい。今日、軍人というのは扱いにくい存在である。しかもゴードンは、軍人らしい最期を遂げながら、同時にきわめてイギリス的な「冒険家」の軍人であった。だからこそ、ストレイチーのゴードン将軍は、四人のなかでも最も理解されにくかった人物ではなかろうか。日本ではとりわけそうであったように思われて、だからこそ扱うだけの意味があろう。

二　二種のゴードン訳・戦中と戦後

ストレイチーのゴードン将軍伝には、ともにかなり古いものだが、これまでに少なくとも二種の邦訳がある。一つは、堀大司訳（白水社出版）であり、もう一つは日高直矢訳（福村書店出版）である。

前者には、八〇ページにも及ぶ、きわめて詳細で丹念な注釈が付されており、後者は注釈は簡単であるが、そのかわりに、フロレンス・ナイチンゲール伝をも収めている。

しかしながら、こうした相違よりも二つの訳でいま注目したいことは、堀訳が一九四一年（昭和一六年）五月に出ており、日高訳が一九五二年（昭和二七年）八月出版という事実である。すなわち、前者は太平洋戦争の直前の出版、後者は戦争後まもない時期の出版なのである。[4]

いうまでもなく、この事実に注目せざるをえないのは、ゴードン伝が主人公である軍人の壮烈な戦死と守備隊の玉砕を描いた伝記であるからである。

二人の訳者は、奇妙なことに、いやむしろ訳者の立場として必ずしも奇妙ではないかもしれないが、訳書のあとがきのなかで、この事実にとりたてて言及していないようである。

しかしながら、訳者の弁明があろうとなかろうと、その死の追悼が国葬をもって営まれた大英帝国の「英雄」の伝記を出版するからには、時事的・時局的な意味が当然あったはずである。

堀訳について言えば、戦時下の検閲の厳しい状況においても、「ゴードン将軍の最期」は、イギリスの帝国主着的植民地政策批判として読まれたであろうとともに、イギリス軍人とはいえ、虜囚として生きながらえることを断固として拒否した点で、日本の『戦陣訓』（一九四一年）を先取りして体現した軍神を描いたものとして歓迎されもしたのであろう。

また、日高訳の場合には、戦後民主主義の時代に、何よりも、主人公の将軍と守備隊の全滅は、愚かしい帝国主義への批判書、反面教師的書物として歓迎されたであろう。

問題は、こうした全く異なる出版状況下で、二度翻訳出版されながら、肝心のストレイチーの諷刺というものがどのように受け取られたかである。

すなわち、出版の状況と、じっさいの内容とには捩れがある。イギリスの伝記文学に関心のある知識人の間では、ストレイチーという名はもちろん知られていたであろう。だが、堀訳が戦時下に検閲を免れたこと自体、ストレイチーの正体が一般には警戒されることもなかったことを

明らかに示している。

たとえば、日高訳の「あとがき」では、ストレイチーが「こまかな事実をちりばめるのが得意である」として、「断末魔」のハルツームでゴードンが日記に漫画を描いている事実に言及している。たしかにこれは特異な事実ではあろう。だが訳者は、伝記が何よりも、砦の攻防、主人公の戦死、守備隊の全滅をめぐる物語であることには立ち入ろうとはしないのである。

堀訳もあとがき的な長文の解説を付して、イギリスの伝記文学一般について、アンドレ・モーロワの説を引いたりしながら、その本質を論じようとしているが、かれもまた、ストレイチーのゴードン像については全く語ろうとしていない。

だが、この問題は、ストレイチーのテクスト自体を検討した後でもういちど考えることにしたい。

三　「中国のゴードン」の栄光と悲劇

ゴードンは、二五歳にして初めてクリミヤ戦争で苛酷な試練を経験し、中国では「常勝軍」の先頭に立って太平天国と戦い、アフリカのスーダンではマハージのジハードの生け贄となって死ぬ。こうした最大級の波乱に満ちた五〇年の生涯が、「世界の古典叢書」版でわずか七〇ページ余りの簡潔な伝記に盛り込まれている。ストレイチーは、一九世紀最大の「冒険家」の生涯を、大英帝国の栄光と悲惨とともに、見事に描ききっている。

だがストレイチーが、伝記の冒頭で初めて読者に提示する大冒険家の肖像は、およそ冒険家らしからぬ姿である。

それはナイチンゲール伝の冒頭で、いかにもディバンキングを目的とする伝記作者らしく、いきなり、彼女が「ランプを手にした貴婦人」ではなかった、と既成の像を否定した手法と比べると、ゴードン将軍が登場する舞台の設定は、はるかに周到に準備されたものである。

> 一八八三年のことであった。一冊の分厚い書物を小わきにかかえ、エルサレムの近郊を彷徨う一人のイギリス紳士の姿が見られた。小柄で痩せぎす、勿体振ったところのない容姿は、少し滑るような跳ねるような歩き振りとともに、彼をどこか子供っぽく見せていた。けれどもそれは、白髪まじりの頭髪と髭と多少奇妙ではあるが、むしろ好ましい対照を作り出していた。[5]

この「子供っぽい」初老の紳士が中東を彷徨っていた目的は、携行していた聖書を参照して、キリスト受難の地、エデンの園の位置、大洪水の後に方舟が漂着した地点を確認するためであった。ところが、ヨルダン放浪を一年もの間続けたころに突然、またしても「冒険」が戸を叩くことになる。たちまちにして、「ゴードンは国務の真っ只中に投げ込まれる。彼の運命は、帝国の狂乱と諸民族の定めと一体となってしまうのだ」。

さらにストレイチーは、前以てゴードンの運命を決定した三人の政治家を、ゴードン自身とともに、「英国精神の中に相錯綜せる矛盾を具現している人物」として紹介する。

そのあとで、主人公の波乱に富んだ生涯を誕生から語り出すのである。その叙述は簡潔で無駄がないが、ここでは、最もストレイチーらしい記述の紹介にとどめよう。

ゴードンが「中国のゴードン」の名を轟かせて帰国したあとのことをストレイチーはこう書いている。

もしゴードンが帰国時に彼を迎えた人気の波を喜んで最大限に利用するつもりであったなら、自分の名声を上流社会で宣伝し、「中国のゴードン」にふさわしくその役を演じていたならば、その結果はかなり変わっていたであろう。けれども、ゴードンは生来「非社交的“farouche”」であった。彼の心は晩餐会や堅苦しいシャツには嫌悪を催した。また、婦人たち、とりわけ社交界の貴婦人の前では落ち着かないのであった。おまけにゴードンには世間の汚れにたいする、さらに深い恐れがあった。[6]

こうして煌やかな世界をみずから避けたゴードンが、テムズ河口の要塞構築の監督という、報われない仕事に「六年間も静かに」従事したとストレイチーは記す。ゴードンはおそらく彼の「静かな」信仰の日々を過ごしたのであろう。しかしながら、ストレイチーは信仰とは別の方向へ筆を転ずるのである。

南イングランドの要塞建築現場で、ゴードンが「船員たちと談笑し」、飢餓に瀕している老女や様々なひとびとに食物を分け与えたり、近隣の貧民と気軽に交わる姿をストレイチーは描き出す。その後でさりげなく、「ゴードンはとりわけ男の子が好きであった、襤褸をまとったストリート・チルドレンや、荒くれ者の若い船乗りが彼の周りに群がった」と書き添えている。

だれよりも社交界の寵児になりえたのに、婦人たち、とりわけ社交界の貴婦人を徹底して嫌悪し、そのかわりに、海辺で貧しい「男の子たち」との交わりに日々親しむゴードン。

これまでストレイチーの批判者が執拗にこだわったのは、この箇所である。「世界の古典叢書」では、注釈において、ゴードンという人物は、つねに世間の注視の的であった以上、“a practising homosexual”では少なくともありえなかった、という「精神科医」の診断をわざわざ引用しているほどである。[7]

ストレイチーが批判された、もうひとつのゴードンの性癖である飲酒癖（ウィスキー壜かブランデー壜か）の問題とともに、ここでこれ以上詮索するつもりは全くない。それよりも、「中国のゴードン」が社交界で“farouche”であらざるをえない姿を描くストレイチー自身について、むしろ少しこだわってもよいであろう。[8]

ストレイチーの祖父も父も、海外で大英帝国の植民地経営に功績を挙げ、当然のこととして、その功績を帯びて帰国し、故国では女性を交えた社交の日々を送ったのはずであった。王族や貴婦人に燦然と彩られた世界に身を置くことに耐えられず、恐らくだからこそ、それとはまったく別の栄光を執拗に求め、その方向にひたすら突き進んだ男、その男の悲劇を書くのに身を削った伝記作者ストレイチーに関して、すでにマイクル・ホルロイドがその人間関係を可能な限り追究し、驚異的な情報を蓄積した。だが、ストレイチーの場合にも、問題なのは彼が“a practising homosexual”であるかどうかよりも、彼の書いた伝記のテクストに注目したいのである。

四　混迷のなかで

じっさい、ゴードンの生涯を描くストレイチーの態度は、ある研究者も述べているように、「諷刺と同情を行き来している」と思われるのである。[9]このことは、ゴードンが軍人として最大級の栄誉・栄達に輝き、同時に凡人には理解しがたいほどの狂信的傾向とを一身に併せ持っていた人物であるだけに、とりわけ注視せざるをえない。

ここで、われわれは、とりあえずゴードンの「最期」をめぐる状況を

見極めておかねばならない。

「ゴードンの最後の大冒険も、最初のそれと同様に、宗教的反乱がその原因となったのであった」、とストレイチーはゴードン伝の四分の一が終わったところで、書いている。

『ヴィクトリア朝の偉人たち』のなかで、四人を叙するに当たって、かれが記述の仕方を画一化せず、区別をつけていることに注意せねばならない。たとえば、ナイチンゲール伝では、全体を五つの節に分けていた。前置きの節のあと、彼女の生涯には起承転結があるかのように。

ゴードンの場合には、ナイチンゲール伝より少し長いにもかかわらず、そのような節分けはまったくない。ゴードンの生涯は、あれほど波乱に富んでいるのではあるが、また、隠遁的な静止の時期をふくんでもいるのだが、ストレイチーの筆は、彼の最期に向かってひたすら突き進んで行くのである。

ゴードンが対処せねばならなかったのは、スーダンにおけるマーディの乱という、中国の場合と同様に、またしても「宗教的な反乱」であった。だが、ロンドンからの電報に勇躍して駆けつけたにもかかわらず、政府部内では必ずしも一致してゴードンをスーダンの危機に当たらせると決定していたのではなかった。しかも、彼が果すべき任務自体が曖昧さを残していた。

故国へ帰った主人公は後景に退き、長くない伝記のうち、かなりのスペースが政府内の混乱の記述に当てられる。こうして、ゴードンの悲劇は、彼がロンドンに到着したときに半ば決定していたのであった。いやむしろ、このような事態こそが、ゴードンの真の悲劇であった。しかも、情勢の推移が、ゴードンの性格とあいまって、任務の曖昧さをさらに複雑にしてしまう。

いやおうなしに、諷刺家ストレイチーの筆は、主人公自身を批判的に扱うのではなくて、彼が被害者として翻弄される過程と、そして、周囲のあれこれの状況の方へ向けられることになる。ストレイチーはこのことを最初から予期していたであろうか。

ゴードンの「最期」を見届けるまえに、重要で興味深い文献である、彼のハルトゥーム籠城日記をぜひ検討せねばならない。

（未完）

（本学名誉教授）